

和文典

上

C 26
2388

福岡縣福岡師範學校

書門 漢文 圖

部 經文

番

19

號

3 冊ノ内

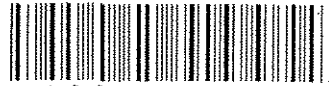
才一

T1A3

11

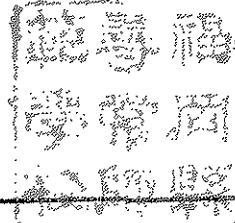
O 93

圖書 和図書 逆



a 1 3 8 0 3 2 8 9 4 7 a

福岡教育大学蔵書



緒言

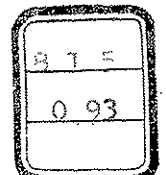
此書の中等教育用ふべき文典あれば。例を多くの古文よりいざせり。およびして古文を読み習はん用ふもあつべしとてあり。

中にも。短歌のわづかの句は意乃まそまりゐて。前後の關係もわかりよく。諸記しおかんよもたやをき事。長文のひきぬきふまさるはるかあれば。つとめて多く例にひきたり。

文法の嚴あるがよけれど。嚴をのみ頑し守りて變といふ事を知らざれば。その作れる文の活氣なきものとなるべし。文法家の文おもしろからむの謬いこれあり。文典を

和文典

緒言



大和田建樹著

和文典

全

東京

中央堂發兌

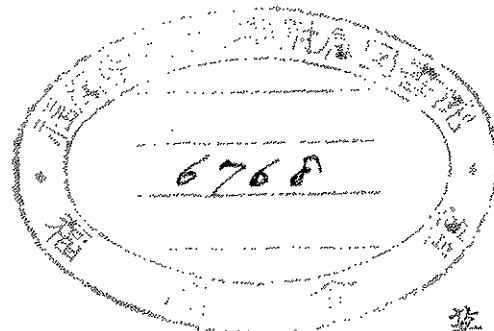
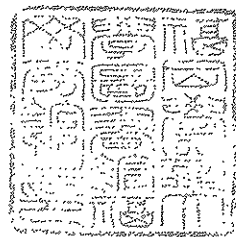


學ぶふいさる心得なかるべからむ。

初等教育に用ふべき簡易の文典に別あり近日世よりいだまへし。

明治廿三年十二月

著者 志 居



引用書目

書名を略して引けるものには、其略せる文字だけに丸點を付く。

書名の下にしるせるは作者の名。括弧の中よりしるせるは其時代あり。



伊勢物語(中古)

阿佛尼

十六夜日記(近古)

堀河後百首(中古)

平家物語(近古)

紀貫之

土佐日記(中古)

神樂歌(中古)

源澄集(中古)

源兼澄

蜻蛉日記(中古)

右大将道綱母

竹取物語(中古)

太平記(近古)

つれ／＼草(近古)

吉田兼好

紫式部日記(中古)

紫式部

空穗物語(中古)

宇治拾遺(中古)

源隆國

謠(近古)

大鏡(中古)

大和物語(中古)

萬葉和歌集(上古)

枕草紙(中古)

清少納言

增鏡(近古)

源氏物語(中古)

紫式部

源平盛衰記(近古)

佛足石歌(上古)

風雅和歌集(近古)

古今和歌集(中古)

古今和歌六帖(中古)

後撰和歌集(中古)

後拾遺和歌集(中古)

今昔物語(中古)

源隆國

榮花物語(中古)

興儀抄(中古)

藤原清輔

催馬樂(中古)

散木弄歌集(中古)

藤原俊賴

讚岐集(中古)

源三位賴政女

山家集(近古)

西行法師

金葉和歌集(中古)

玉葉和歌集(近古)

水鏡(中古)

拾遺和歌集(中古)

詞花和歌集(中古)

新古今和歌集(中古)

新勅撰和歌集(近古)

續後撰和歌集(近古)

續古今和歌集(近古)

續千載和歌集(近古)

續後拾遺和歌集(近古)

新千載和歌集(近古)

拾玉集(近古)

慈鎮和尚

拾遺愚草(近古)

藤原定家

神皇正統記(近古)

北畠親房

千載和歌集(中古)
千五百番歌合(近古)
住吉物語(中古)

和文典目錄

上卷

第一編 字格

音 一 丁

母音 二 丁

單母音 同

複母音 同

子音 三 丁

單子音 同

複子音(拗音) 同

喉。齒。舌。唇。鼻音 同

清音。濁音……………四丁

文字……………同

假名……………同

平假名……………五丁

片假名……………七丁

真假名……………八丁

濁點。重濁點……………同

漢字……………同

正字……………同

借字……………同

熟字……………九丁

假名と漢字……………同

送假名……………同

送字……………十丁

假名の送字……………同

漢字の送字……………同

語原……………十二丁

本語原……………同

外語原……………同

漢語原……………同

梵語原……………十四丁

洋語原……………同

音の轉用

同

通音

同

音便

十六丁

約音

十七丁

延音

十八丁

略音

同

添音

同

連音

十九丁

詰音

二十丁

假名遣

二十一丁

本語原の假名遣

同

母音とは。行音便

二十二丁

濁音

三十一丁

方言

三十三丁

外語原の假名遣

三十四丁

母音の頭音

三十六丁

あ「れ」の頭音

三十九丁

い「ゆ」の頭音

四十一丁

や「よ」「え」の頭音

四十二丁

く「わ」「か」「こ」の頭音

四十六丁

う「ふ」の末音

四十八丁

濁音

五十丁

中 卷

第二編 語格

一 丁

七品詞

同

名詞

同

實名詞

同

代名詞

同

熟字名詞

四 丁

動詞

五 丁

自動詞

同

他動詞

六 丁

助動詞

八 丁

熟字動詞

十五 丁

動詞の用方

十六 丁

形容詞

十七 丁

熟字形容詞

十九 丁

形容詞の用方

同

副詞

二十一 丁

熟字副詞

二十二 丁

後詞

同

常の後詞

二十三 丁

疑問後詞

三十五 丁

力後詞

三十七 丁

接續詞

四十三丁

感詞

四十四丁

詞の活用

五十三丁

用言

同

四段の活用

同

上下二段の活用

五十四丁

一段の活用

五十六丁

變格

五十七丁

形・狀言

五十九丁

さ。の活用

同

し。の活用

同

活用の五階

六十丁

用言の五階

同

形・狀言の五階

七十三丁

助動詞の活用

七十七丁

用言・狀助動詞

同

形・言・狀助動詞

七十九丁

特・狀助動詞

八十丁

体助動詞

同

下 卷

第三編 章格

一 丁

章句の種類

同

正句	同
倒句	二丁
挾句	同
轉句	三丁
略句	同
重語	五丁
係詞結詞	六丁
第四編 歌格	二十二丁
歌の種類	同
短歌	同
長歌	二十四丁

旋頭歌	二十六丁
今様	二十七丁
歌曲	同
字あまり。字足らる	二十八丁
装詞	三十丁
返詞	同
兼詞	三十二丁
言掛	同
縁語	三十三丁
序句	三十四丁
枕詞	三十五丁

和文典 上卷

大和田建樹 著

和文典の。日本文を正しく書く爲の規則を載せたるものなり。之を字格語格章格歌格の四篇に分つ。

第一編 字格

意を聲ふてあらはすを音といひ。形ふてあらはすを字又ハ文字といふ。この音と字との用ひ方を教ふるを字格と

いふ。

音

わが國語の音の四十七を基とす。されどいうえの三音は輕重の別あれば。之を二つづゝふらぞへて五十音とせるあり。之を分類して。左の如く一覽表に列ねたるを五十音圖といふ。

あ	か	さ
い	き	し
う	く	す
え	け	せ
お	こ	そ

た	な	は	ま	や	ら	わ
ち	に	ひ	み	い	り	ぬ
つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
て	ね	へ	め	に	れ	ゑ
と	の	ほ	も	よ	ろ	を

これを縦よむを行といひ。横よむを列といふ。その頭の音をよなへて。その行ある音。列ある音。表らしむるあり。すなはち。あ。行。か。行。といへば。あ。い。う。に。れ。か。き。く。け。この事。あ。列。い。列。といへば。あ。か。さ。た。あ。は。ま。や。ら。わ。い。き。し。

ち。ひ。み。い。り。る。の。事。と。ま。る。べ。し。

音は獨立してよばるゝものぞ。他の音の助によりてよばるるものぞの。二つあり。前のを母音とひひ。後のを子音とひふ。

母音 母音の喉より妨あしよ出づる音よて。子音の發音を助くるつとえあり。之を單母音複母音れ二つに分つ。

單母音 單母音の長く引きても聲の變はらぬものにて。あ。行。これなり。

複母音 複母音の單母音れ二つ重あれるものにて。い。音れ重ある時のや行をなす。イ。ア。の。や。となり。イ。ウ。ハ。ゆ。とあり。イ。オ。の。よ。とある。たゞひ。に。れ。二。音。の。發。音。變。は。ら。ざ。れ

ど。重くなる音と知るべし。

う。音の重ある時のわ。行。をあす。ウ。ア。の。わ。となり。ウ。イ。の。ゐ。とあり。ウ。エ。の。ゑ。とあり。ウ。オ。の。を。とある。う。の。發。音。變。は。ら。ざ。れ。ど。重くなる事。前の。い。に。よ。同。じ。

子音 子音の母音の助を偕りて發音するものよて。之を單子音複子音の二つに分つ。

單子音 單子音の單母音の助を偕るものふて。母音を除けば。五十音皆これあり。

複子音 複子音(又の拗音)の複母音の助を偕るものふて。外國語より來れる詞ふ多し。す。あ。は。ち。

ひ。き。や。く。(飛脚) き。よ。ね。ん。(去年)

たいしや。(大敵)
 じしよ。(御所)
 ちよくし。(勅使)
 てんふよ。(天女)
 はんりやく。(延暦)
 くわし。(菓子)

しゆんくわん。(俊寛)
 ちやつが。(茶壺)
 はんみやぎやう。(般若經)
 ひやくくわん。(百官)
 りよかう。(旅行)

の類なり。

また發音の出所によりてよぶ事あり。左の如し。

喉音 喉音とい母音をいふ。

齒音 齒音といか行さ行の音をいふ。

舌音 舌音といた行お行ら行の音をいふ。

唇音 唇音といは行ま行の音をいふ。

鼻音 鼻音といむ音ぬ音う音の變音ある。ん音をいふ。

清音濁音 子音は濁れる聲。重く濁れる聲を持つべき音あり。か行さ行た行は行に濁れる聲。すあはち。わがみ(我身)うぐひす(鶯)ひざ(膝)かぜ(風)かち(梶)まど(窓)しば(柴)ひびき(響)の類の音を持つ。之を濁音といふ。

は行に重く濁れる聲。すあはち。けんむく(建白)せんぴ(先非)けんぷ(絹布)てつべき(鐵壁)よつぱん(日本)れ類の音を持つ。之を重濁音といふ

以上の濁音重濁音は對して。他の音を清音とよぶあり。

こゝに音れ名稱をくりしへせば左の如し。

- 第一 行と列とのよびかた。
- 第二 母音子音等のよびかた。
- 第三 喉音齒音等のよびかた。
- 第四 清音濁音等のよびかた。

文字

文字を假名漢字の二つに分つ。

假名 假名のたゞ一音のみをしめす文字あり。

これを平假名片假名真假名の三つに分つ。

平假名

平假名の草假名またいろいろは假名ともいふ。

文をかくふの之を用ふるを正しとす。

昔より用ひ来れる中ふ。普通のものゝ今の普通は用ひぬものゝを區別して。次ふあり。

普通のもの	今ハ用ひぬもの
い	以
ろ	路
は	は
に	に
ほ	ほ
へ	へ

や	ま	け	ふ	こ	い	て	あ	さ	き	ゆ
る	は	さ	ぬ	あ	え	そ	何	さ	き	ゆ
ぬ	を	を	多	了	い	う		は	り	
									よ	
麻	解	矢	旅	夢	借			神	義	遊
多	音濁	音濁		あ	音濁			あ		
								新		
								白		
								音濁		

め	み	し	ゑ	ひ	も	せ	す
え	い	え		む	も	と	も
				母	母	勢	は
米	災	新	海	如	茂	是	あ
	兄	白		飛	若	音濁	音濁
		音濁		日	久		文
				依			音濁
				音濁			

此内。北印のつきたるハ調の上ハ用ひず。三角印のつきたるハ下ハ用ひぬをよしとす。

片假名 片假名の平假名お次ぎて文を書くに用ひ。又

の平假名れ中に交へてゐる。特別にゑあるとして用ふ。(西洋の地名人名の類なり)されどもざりふ平假名よりうち混して用ふるをば忌むべきなり。古く用ひたる字体のさまざまあれど。今の一体に定まれり。左の如し。

イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト
チ	リ	ヌ	ル	ヲ	ワ	カ
ヨ	タ	レ	ソ	ツ	ネ <small>ヌ</small>	ナ
ラ	ム	ウ	井	ノ	オ	ク
ヤ	マ	ケ	フ	コ	エ	テ
ア	サ	キ	ユ	メ	ミ	シ
エ	ヒ	モ	セ	ス		

真假名

真假名の萬葉假名ともいふ。これのもとは平假名片假名などの便利なかりし時代より。漢土の文字を借りて用ひたるものなれば。今の書くべき用なし。たゞ特別の文字の飾として古体を學ばんの妨なし。字体に一定せるものおけれど。まづは平假名の楷書あるがまし。

濁點重濁點

平假名片假名の濁音の時。右の肩お二重點を加ふ。之を濁點といふ。が。の類なり。

重濁音の時。右の肩お丸點を加ふ。之を重濁點といふ。む。の類なり。

真假名の右の印を用ひをして。他の濁點の文字を用ふ。我邪の類なり。但し真假名よて重濁音を用ひたる例なし。

漢字 漢字の音のみあらを。意までをしめすものなり。

漢字の用ひ方に。正字。借字。熟字の三つあり。

正字

正字とい一字毎に。音と意とのいづこふても離れぬものをいふ。これは訓讀して用ひたるものと。音讀して用ひたるものと二つあり。前のいひと人をあて。は。か。とりは花鳥をあて、用ふる類をいひ。後のいふんげんを人間と書き。らくくわ。ひてうを落花。飛鳥と書く類をいふ。

借字

借字とい正字と發音同くして。意ことなるもの。借り用ふるをいふ。をりふし。お折。節を借り。きちやう。凡帳。お木。丁を借る類あり。

この折。花を折る。鳥帽子を折る。おどお用ふれば正字なれど。時の意のをりよ。發音同じくて意義ことなればなり。又きちやうの凡帳と書くが正字あるを。畫の少あきよまかせて木丁の音のみを借りたればなり。

熟字

熟字とい二字三字を連ねて。わが一語をあて用ふるをいふ。雲雀。杜若。紅葉。海人。女郎花。五月雨の類あり。

さればこの中の一字をぬきて。雲をひと讀み海をあ。と讀むこといできぬなり。又これの普通に使ひ慣れたるもの、外に用ふべからず。ひばりを告天子。かきつばたを紫藤花と書く。よからぬあり。

假名と漢字 假名と漢字とい交しへ用ふる習慣なるが。い

かある割合ふすべきかといふ。讀み易からしめん事を主とする外。定まりたる規則にかけれど。注意すべき事あり。左の如し。

其一 二様は讀まるゝ詞に假名を用ふるがよし。されどこれも上下の關係ふたりて。讀むたがふまじき者の妨けなし。

其二 漢語より來れる詞に。漢字を用ふる方よし。

其三 人名地名の類。普通ハ漢字もて書ふ事ハ定まりたるえのい。それふしとがふべし。

送假名 漢字のあとハ假名をそへて用ふる事あり。之を送假名といふ。もかはち變化すべき音だけを書きそふるあり。たとへむ。

學ば、	學びて	學ぶい	學べど
載せて	載せれば	起きぬ	起くるふ

清くて	清きふ	清し	清ければ
-----	-----	----	------

みどの類あり。

たゞ注意の爲ふするもあり。たとへば。

交^あひ^ある 現^あい^あま

みどの類ふて。まじ^ある。げん^あを^あと^ああ^あや^あま^あらせ^あじ^あと^あて^あかり。又たゞ讀みやすからしめん爲のみのもあるべし。これらの類はいくらもあるべく。定まれる法あり。書く人の心おまかせて。入用と見とむる送假名をつけおばそれみてよろし。

送字 同じ文字を重ねる時。二字目よりいくりかへすしるしを用ふ。これを送字といふ。

假名一字の送字に、一、點を用ふ。二字以

上の送字に。く。點を用ふ。

ちゝはゝの恩
よゝのみかど

あれく見よや
うれしくと思ひけり

の類
みり。

漢字は何字ふても。楷書の時は一字毎

よ。々。點を用ひ。行草書の時は。二。點を用ふ。

早々。
色々。
本々。
皆々。

の類なり。

送字を用ふるに注意すべき事左の如し。

其一 詞の尾にあるものと。頭にあるものの時に用

ふからぞ。

花ををる
人々ひとびとふふたるとは

の類あり。(されど同じ文字を重ねて右の如く書かんも拙ければ。字体を變へて花を成るゝど、書くか。又い折る似るぞ。漢字を用ひん方よかるべし)

其二 行かはれば用ふべからむ。

ち は の 思 い

の類ありかゝる所い。ちち。と別々よかくべし。

其三 濁點重濁點ハ。送字ハ新_レ加_レるもの、みふつ
くべし。

かゝむ　そゞむ　かたぐ。

の類あり。かをく。まづくの類いつくるみ及ばた。
又あづ。玉ぞいの類い。そのまゝふてよき事もとよ
りあり。

其四　二字以上の送字の一つ詞か。一つゞきは讀まる
るかの外い。用ふべからた。

あいにく　おもしろし。

かとい。一つ詞をおくれるあればよし。

くりかへし。見にたり。

かとい。一つゞきは讀まる、詞をおくれるあればよし。
し。はや住の江ふつきふけり。かど書かんよい。い

づれの字よりおくれるといふ事さだからねば。諸
物あどの外い。これらの送字をすまじきをいふ
り。

語原

國語の起り。固有のもの。外國語より來れるものとの
別あり。前のを本語原といひ。後のを外語原といふ。但し
純粹は外國語より出でたるものならでも。外國語風は組
み立てられたる詞い。なほ外語原と稱ふるあり。

本語原　本語原のつぎ。はあ。ねむる。さむるの類にて。國語

の大かたをしむる詞あり。

外語原 外語原は外國文學の入り来ると共に殖にゆくもの
にて。今行はるゝものの。漢語原。梵語原。洋語原の三つは
わかる。

漢語原

漢語原は支那語はもとづくものをさす。發音
は漢音。吳音。雜音の三つあり。漢音。吳音は支那の一地方
の音なるが。古く渡り来てひろく行はれたり。雜音はこの
二つは洩れたる音を。地方と時代とを論ぜむ。残らむさす
あり。その用ひかたの習慣はよりて。やゝ定まりあるもの
をいはし。

漢音は漢字を音讀する時の普通の音あり。漢文の中

の音讀は用ふる音なり。畫字引をひけば右の傍はし
るせる音なり。

吳音は佛法上の詞は用ふる音なり。古の事物の名は
多く用ひたる音なり。

雜音は極めて用ひ狭き音にて。定まりなし。

されどかゝはるべきものはあらむ。次はしめす三つの音を
くらべ合はせて。その大よきを知るべし。

漢音の

ふし(武士)

ばんみん(万民)

ちよがく(女學)

しせい (死生)

ぐんこう (軍功)

へいし (兵士)

けいしよ (經書)

吳音の

むしや (武者)

まんざいらく (万歳樂)

なんよ (男女)

しやうし (生死)

くどく (功德)

ひやうらう (兵糧)

ほけぎやう (法華經)

但し漢音も吳音も同音なる文字。いと多し

雜音の

あんぞや (行脚)

ちやうちん (提灯)

しやんはい (上海)

梵語原

梵語原のものも印度の詞にて。佛法と共に入る来れるものをさす。佛法の支那を経てわが國に入りたるなれば。大方に漢語原の譯語なるが多き中ふ。譯しがたきものゝ。原語のまゝを漢字の音もてしるしたるあり。

阿彌陀。菩薩。那落。伽の類これあり。

洋語原 洋語原の西洋の詞より来れるものをさす。耶穌。基督。亞細亞。亞米利加の類あり。

音の轉用

音をつらね詞をつらぬる時。口つゞきの便宜ふよりて。よびかたの變はる事あり。之を音の轉用といふ。これを通音。音便。約音。延音。略音。添音。連音。詰音の八つに分つ。通音 通音とい同行か同列かの。他の音ふよびかふるをいふ。之を通ふするともいふなり。但し同列ふても。子音の母音ふ轉つたるをば通音の内に入れむ。さて同行の。

「てまくら」を

「たまくら」といひ

「すげがさ」を

「すががさ」といひ

「ふねうた」を

「ふなうた」といひ

「てのすゑ」を

「たなすゑ」といひ

「しみかぜ」を

「かむりぜ」ともいふ

又外語原の耳なれぬ音を。同行ふよびかふることも常ふて。

「せつゑ」(節會)を

「せちゑ」といひ

「せうそく」(消息)を

「せうそく」といひ

「しをん」(紫苑)を

「しをん」といひ

「えん」(縁)を

「えん」といひ

「どうしん」(燈心)を

「どうしみ」といふ

類あり。またま行を行を同行の變音ゆかへて。

「あまみして」を

「あまんして」といひ

「讀みて」を

「讀んで」といひ

「いふて」を

「いんで」といふ

類もあり。

同列のい。

「けぶり」を

「けむり」といひ

「をみあべし」を

「をみなめし」といひ

「どがしき」を

「どもしき」といふ

これらは行の濁音を。ま行ふ通ひし讀むものゝみあり。

また外原語の複子音を。同列の單子音よかへて。

「お。ゆ。し。や。」(従者)を

「お。さ。」といひ

「あ。や。う。」(笙)の笛を

「さ。うの笛」といひ

「ゆ。ぬ。き。よく。」(遺曲)を

「ゆ。ぬ。こ。く」といふ

類もあり。

音便 音便とい詞の中か末かよある子音をやはらげて。母

音よよびかふるをいふ。

「琴ひひきて」を

「琴をひいて」といひ

「水をせきて」を

「水をせいて」といひ

「きさきの宮」を

「きさいの宮」といひ

「涙をかがして」を

「涙をながいて」といひ

「おもしろく。て」を

「あるへくもみねを」を

「おもしろ。うて」
「あるへうもみねを」
いひ

「わらぐつ」(藁靴)を

「わらうづ」
「たうげ」
ともいひ

「たむけ」(峠)を

「たうげ」
ともいふ

これらの同列の母音をかへたるあり。文字のあ。行の假名を用ふべし。

「つかへまつる」を

「つかうまつる」
ともいひ

「こみち」を

「こうち」
ともいひ

「かみぐし」を

「かうぐし」
ともいひ

「とりで」を

「どうで」
ともいひ

「神まゐで」を

「神まうで」
ともいひ

「手習ひて」を

「手習うて」
ともいふ

これらの他列の母音をかへたるあれど。文字の皆あ。行の假名を用ふべし。またび音の音便い。

「學びて」を

「學うで」

「はこびて」を

「はこうで」

といふが正しきを。「學んで」「はこんで」と。すべてん音の轉じはてたれば。今いん音の方を用ふべし。但し此ん音のむの變音のあらで。う音の訛りたるものなれば。ん文字をば書くもせよ。かほ母音の内と心得べし。

以上のすべて。よびかへたる音のまゝは文字をもちき

かふべし。たゞい。音う。音の二つに限るあり。以下のいは。行をわ。行よ。びかふるのみあて。文字のかきかふる事あり。

「かはみづ」の

「かわみづ」と読み

「さいはひ」の

「さいわい」と読み

「ゆふぐれ」の

「ゆうぐれ」と読み

「さかへ」の

「さかへ」と読み

「あがほ」の

「あがほ」と読む

約音 約音といふ二音を合はせて。一音とあすをいふ。之をつづむるといふなり。

「さしあぐ」の

「さしぐ」とあり

「雪ぎに」の

「雪げ」とあり

「言づたへ」の

「言づて」とあり

「旅ふある身」の

「旅ある身」とある

この約むるといふ。上の音と。下の音の含みもつ母音とを合はせるをいふあり。

延音 延音といふ約音の反對にて。一音を離して二音とあすをいふ。之をのぶるといふあり。

「いふ」は

「いはく」とあり

「おはす」の

「おはさふ」とあり

「うつる」の

「うつろふ」とあり

「いでたつ」の

「いでたゝす」とある

この延音を古文ふ。尊者のしわざをいふ時ふ多く用ひたり。「いでたち

樂いて「う」とりもち給ひて「あどらふへを」いでたゝして「う」とりもち
して「あどらふ」類あり。

略音 略音とい音を省くをいふ。

- | | |
|--------------|----------|
| 「くわんげん」(管絃)を | 「くわげん」とし |
| 「うつて」(討手)を | 「うて」とし |
| 「どくきやう」(讀經)を | 「どきやう」とし |
| 「ふみばこ」(文箱)を | 「ふばこ」とし |
| 「あらうを」(白魚)を | 「あらを」とし |
| 「ねんぶつ」(念佛)を | 「ねぶつ」とし |
| 「こくふ」(國府)を | 「こふ」とす |

添音 添音とい音を添ふるをいふ。

- | | |
|------------|-----------|
| 「あべ」(四時)を | 「あいじ」とし |
| 「あか」(詩歌)を | 「あいか」とし |
| 「よばう」(女房)を | 「よようばう」とし |
| 「うちを」(誦)しを | 「うちだんじ」とし |
| 「あらをい」を | 「あらだんば」とす |

連音 連音とい上の詞の本音おひかれて。下の詞の頭音を
よびかふるをいふ。

濁音 濁音となるものあり。

- | | |
|----------|-----------|
| 「すみ」(墨)の | 「うすをみ」とかり |
| 「しま」(島)の | 「こしま」となり |
| 「かみ」(神)の | 「かみぐ」となり |

「た」(田)の

「やまだ」となり

「どり」(鳥)の

「をしどり」となり

「はな」(花)の

「をばな」となり

「ふ」(笛)の

「よこぶえ」となる

これらの二語の一語となる時ふごるなり。されば「はなとり」「花鳥」あめ
つゆ「雨露」をどの二語なれば。此例ふあらず。

漢語原の詞の。ん音つ。音の下ふ来るものを。濁音が重濁
音が小濁を。中ふも重濁音もつともおほし。

「はく」の

「くわんむく」(關白)となり

「やく」の

「かんやく」(南北)となり

「ひ」の

「せんぴ」(先非)となり

「へい」の

「くわんへい」(官幣)となり

「ほ」の

「さんぽ」(散歩)となり

「ひつ」の

「いつびつ」(一筆)となり

「ほふ」の

「せつぷふ」(説法)となる

また漢語原の。ん音の下ふ来る母音をば。同列のな。行
ふ読みかふるあり。但し文字のかさかふる事なし。

「おんあい」(恩愛)を

「おんあい」を讀み

「にんいん」(延引)を

「にんふん」を讀み

「ふんうん」(紛紜)を

「ふんぬん」を讀み

「いんにん」(因縁)を

「いんねん」を讀み

「くわんおん」(觀音)を

「くわんのん」を讀み

「ふんわじ」(仁和寺)を

「ふんあじ」と読む

詰音 詰音その下の詞の頭音ふひかれて。上の詞の末音を
息のみふて發音するをいふ。

「がくき」(樂器)の

「ガツき」の如く

「らくくわ」(落花)の

「ラツくわ」の如く

「しゃくけう」(石橋)の

「シャツけう」の如く

「せきき」(石器)の

「セツき」の如く

「げきけん」(擊劍)の

「ゲツけん」の如く

「かふせん」(合戦)の

「カツせん」の如く

「かふちう」(甲冑)の

「カツちう」の如く

「ほふけ」(法華)の

「ホツけ」の如く

「せつしやう」(殺生)の

「セツしやう」となり

「けつくわ」(結果)の

「ケツくわ」とあり

「ぶつふふ」(佛法)の

「ブツフフ」とあり

「せつふ」(節婦)の

「セツフ」とある

以上の音の外文字をばかきかふる事をし。たゞふ音の
つ音ふかへてかく事つねあり。また。

「勝ちて」を

「勝つて」

「立ちて」を

「立つて」

「よばゝりたり」を

「よばゝつたり」

「人ありて」を

「人あつて」

といふ類は。常の法あらねど。用ふべき所は用ひてよし。

戦ひて」を

「むかひて」を

といふ類い。前のよりいやしきよびかたなれば。好みて
い用ふべからむ。

「戦つて」

「むかつて」

假名遣

同音は聞えて同字からぬ詞を書き分くる法を。假名遣といふ。これを本語原の假名遣と。外語原の假名遣との二つに分つ。

本語原の假名遣 本語原のい左の如し。

第一。母音とは。行音便との假名

母音とは。行の音便と

ふ。同音は聞ゆるものい左の如し。

い	ゐ	ひ
う	ふ	
に	ゑ	へ
お	を	ほ
あ	は	

この内い。えの二音い。あ。行とや。行と文字同トければ。
や。行のを。假名遣よていすべて。あ。行と稱ふべし。

今この假名遣を簡單はお平にんい。下の如き法を用ふ

べし。

音便に決して頭音のある事なし。故に頭音にかゝるを母音と知るべし。すゐはち。色。牛。驚の類にひろ。ふし。は。しと書く事にあきあり。又ゆび。うめがえの。い。えの類に。分てば二つの詞とあれば。これも頭音ある事もちろんあり。かゝて頭音の母音は二種あるえのい。その數すくあき方。すゐはちをの類をおぼえて。其部あかりし詞に他の方。すゐはちい。おの類の假名と心得べし。中音末音もなをらへて知るべきあり。左は片假名よて書けるい。こ。ふしめさ。懸假名。すゐはち準へて知るべき假名なり。

其一。い。ゐ。ひ。の假名

これに頭音よてい。い。を。中音末音よてい。い。ゐ。をおぼえおくべし。

頭音		中音	
ゐ		い	
と		ゐ	

すゐはち。右の平假名の分をおぼゆべきなり。その詞左の如し。

ゐ (井)

ゐ (蘭)

ゐ (猪)

ゐる (居)

ゐる (卒)

ゐもり (蛸)

ゐあか (田舎)

ゐざる (膝行)

あゐ (藍)

うゐゐ (童)

もゐゐ (基)

くゐゐ (烏芋)

くらゐ (位)

まゐゐ (参)

ゐたゐ (乞食)

あぢさゐ (紫陽花)

くれゐゐ (紅)

かい (權)

おい (老)

くい (悔)

むくい (報)

其二。う。ふ。の假名

これらの末音のう。をおぼえおくのみ

よて足れり。

頭音	ッ
末音	フ う

右の如く平假名の分の一つあれば。左の三つを覺ゆべし。

うゝ (植)

うゝ (飢)

すう (据)

其三。に。ゑ。への假名

これの頭音ふてゐゑを。中音末

音ふてゐゑを。を。お。不。え。お。く。べ。し。

頭音		中音	
ゑ	エ	ゑ	え
へ	ゑ		

右の平假名の分をお不ゆる事前の如し。

ゑ (餌)

すゑ (据)

ゑむ (笑)

すゑ (末)

ゑふ (酔)

すゑ (陶)

ゑる (彫)

ゑゑ (聲)

ゑぐる (剗)

つゑ (杖)

ゑぐし (荅)

ゆゑ (故)

ゑんむ (槐)

こゑゑ (梢)

うゑ (植)

つくゑ (机)

うゑ (飢)

ともゑ (巴)

ふゑ (笛)

もゑ (腕)

ぬゑ (鵜)

ひゑ (裨)

さゝえ (小筒)

ひえどり (鴨)

さゞえ (榮螺)

左の詞に同行ふうつりはたらくをくらべ見て。此假名
なるを知るべし。

あえ (血汗などの流るゝをいふ)

「あゆ」ども「あや」す「ども」はた
らく。

あえ (肖)

「あゆ」ども「あや」かる「ども」。

ふえ (殖)

「ふゆ」ども「ふや」す「ども」。

くえ (崩)

「くゆ」ども「くや」す「ども」。

もえ (生)

「はゆ」ども「はや」す「ども」。

もえ (映)

「はゆ」ども。

ひえ (冷)

「ひゆ」ども「ひや」す「ども」。

たえ (絶)

「たゆ」ども「たや」す「ども」。

もえ (燃) (萌)

「もゆ」ども「もや」す「ども」。

こえ (肥)

「こゆ」ども「こや」す「ども」。

こえ (越)

「こゆ」ども。

ふえ (煮)

「ふゆ」ども「ふや」す「ども」。

さえ (河)

「さゆ」ども。

ほえ (吹)

「ほゆ」ども。

みえ (見)

「みゆ」ども。

きえ (消)

「きゆ」ども。

すえ (醪)

「すゆ。」とも。

あまえ (甘)

「あまゆ。」とも「あまやかす」
とも。

おびえ (懼)

「おびゆ。」とも「おびやかす」
とも。

つひえ (費)

「つひゆ。」とも「つひやす」
とも。

わかえ (若)

「わかゆ。」とも「わかやぐ」
とも。

いばえ (嘶)

「いばゆ。」とも。

さかえ (榮)

「さかゆ。」とも。

きこえ (聞)

「きこゆ。」とも。

おがえ (覺)

「おがゆ。」とも。

此外もみだらへて知るべし。

漢文の訓讀は嘶ゆ。覺ゆ。聞ゆ。を。嘶。覺。聞。ふ。あ。ど。したるに誤りあるを。
そ。是。ふ。習。ひ。て。用。ひ。ん。に。正。し。か。ら。ず。

其四。お。を。の。假名

これいたゞを。の假名のみをおが

えなくべし。

頭音	才	を
中音 末音	を	ホ

右の如く中音末音ふいお。の假名かければかり。

を (男)

を (緒)

を (麻) 尾 (尾) 翠 (翠) 小 (小) 岡 (岡) 萩 (萩) 長 (長) 梭 (梭) 叔父 (叔父) 叔母 (叔母) 甥 (甥)

をど (男) をんな (女) 少女 (少女) 大蛇 (大蛇) 犯 (犯) 怒 (怒) 呻 (呻) 拜 (拜) 惜 (惜) 踊 (踊) 可笑 (可笑)

を (櫛) 桶 (桶) 芥 (芥) 節 (節) 檻 (檻) 鴛鴦 (鴛鴦) 愚 (愚) 食 (食) 遠 (遠) 居 (居) 折 (折)

をさか (効) 納 (納) 治 (治) 教 (教) 一昨日 (一昨日) さく (さく) 韋 (韋) 女郎花 (女郎花) 魚 (魚) 十 (十) 竿 (竿)

あをし 青

まをす (申)

いさを (功)

やをら (徐)

みさを (操)

まをる (萎)

まをり (稗)

たをやか (窮窶)

かをる (香)

わざをき (俳優)

左の詞にこの假名ふまざるゝおそれあれば。おがえお
くべし。

あふち (棟)

あふり (馬具の名)

あふひ (葵)

たふる (倒)

あふみ (近江)

かふち (河内)

あふこ (袴)

はふる 又いほふ
るども (屠)

あふぎ (扇)

たふとし (尊)

あふぐ (仰)

とほたふみ (遠江)

以上の詞にふ音の音便はひかれて。あ列の音みをお列の音の如くよばる
べし。

けふ (今日)

てふ (夢てふものあはれてふ言の類)

以上の詞にえ列の音みなよ音を持てる拗音の如くよばるべし。

おふし (啞)

そのふ (園生)

以上の詞のふ音はお列の音はひかれたる讀方と知るべし。

この外「あふ」「えふ」「おふ」の音ふ心かく見ていまざらは

しきが多けれども。其末音を同行ふうつしはたらかせて。其假名をたしかみ知り得べき事。左の例ふつきてすべてをさとるべし。

「あふ」(逢)の

「あひ」とあり

「ねがふ」の

「ねがひ」とあり

「うたふ」の

「うたひ」とあり

「いはふ」の

「いはひ」となり

「ふるまふ」の

「ふるまひ」とあり

「からふ」の

「からひ」とある

「あふ」(醉)の

「あひ」となり

「うれふ」の

「うれひ」とある

「牛おふ」の

「牛おひ」とあり

「ものこふ」の

「ものこひ」とあり

「かどふ」の

「かどへ」とあり

「ものどふ」の

「ものどひ」となり

「とあふ」の

「とあへ」とあり

「たぐよふ」の

「たぐよひ」とある

其五。わはの假名

これの末音のわをおがえおくのみ

おて足れり。

頭音

中音
末音

ワ
ハ わ

右の如く平假名の分ハ一つあればなり。

あわ (沓)	さわぐ (騷)
まわ (皺)	たわむ (撓)
ひわ (鴉)	よわし (弱)
たわら (依)	あわつ (周章)
いわし (鰯)	さわやか (爽)
くつわ (轡)	たわやか (窈窕)
くわぬ (烏等)	こそわり (理)

かわく (乾)

いわけみし (効稚)

第二。濁音の假名

濁音の互ふ誤り易きものの左の如

し。

じ	ぢ
ぢ	づ

これを簡單はおがゆる法ハ。大方前の例ふおなじ。

其一。じぢの假名

これハじの方のみをおがえおく

べし。

じ (不)	まじ (不)
じゝ (己がじゝ)	みじ (虹)
じゝ (繫)	つじ (辻)

ふじ (富士)
 はじ (櫛)
 きじ (雉)
 うじ (蛆)
 そじ (女主)
 さじ (匙)
 くじ (鬪)
 つむじ (旋風)
 つゝじ (躑躅)
 ひつじ (羊)
 あるじ (主)

むじな (貉)
 しじみ (蜆)
 あじか (簀)
 ひじり (聖)
 くじく (挫)
 はじく (彈)
 まじる (交)
 ふじる (蹂)
 はじかみ (薑)
 まじあひ (呪)
 かじく (憔悴)

其二。むづの假名
 べし。

これいむの方のみをお不えおく

むらじ (連)
 うなじ (項)
 おおじ (同)
 いみじ (甚)
 ひじき (鹿尾菜)
 を (不)
 くを (葛)
 もを (鵲)
 すゝ (錫)

まじろく (眩)
 はじむ (始)
 みじかし (短)
 なまじひ (愁)
 かたじけなし (辱)
 すゝ (鈴)
 はを (筈)
 かを (數)
 ねずみ (鼠)

みゝず (蛭蛸)

すゞろ (漫)

すゞめ (雀)

ゑんず (槐)

すゞき (鱸)

たゝずむ (才)

すゞり (硯)

なむらふ (準)

すゞし (涼)

すべて本語原より。頭音は濁音ある詞なし。されど俗語方言ふいなしとも限られぬ。然るときは輕き方よしとがひて。このしどの方を用ふべし。

また連音の濁音は。その詞を清音は歸して假名を知り得ん事やすかるべし。それい。

いしをり

うすゞみ

い。「搦」「墨」の詞より成れるなれば。その假名を知る事たやすからん。

かみなづき

ふるづか

い。「月」「塚」あればづの假名なる事もちろんあり。

いたじき

よしほ

い。「敷」「汐」あればじの假名なるべく。

あさち

ちりぐ

に「茅」散なればちの假名あるいなどはしき事あるまじ。

これらのすべて。外語原の連音ふもあたりて心得なくべき事あり。

方言の訛

以上ふあげたる假名遣い。普通同音ふきこゆるものゝみなれば。ところふよりてい。假名の通ふ差別して發音する地方もあり。又この假名遣の外ふも。同音の如く發音をあやまる地方もあり。されば假名遣い。甲の地方ふい無用なるもあるべく。乙の地方ふい不足あるもあるべし。不足ならん地方の人のなほこの上はその發音に注意して。正しく書き分けん事を心がけざるべからず。さて地方ふよりて訛あるものい。

い。い。ひ。便音と

え。え。へ。便音と

家をいひと書き。海老をいびと書き誤る類なり。

し。と

す。と

ち。と

つ。と

じ。ち。と

を。づ。と

獅子をすゝと書き。煤をしゝと書き。土をちゝと書き。

又いつゝと書き。味をあづはひ。小豆をあぢきと書き誤る類なり。

ひ。と

し。と

火をしと書き。直垂をしたゝれと書き誤る類あり。但しこれい。しをひと書き誤る事いまれふあれども。いとす

くおし。

外語原の假名遣 外語原の詞の。原語の發音文字ふしたか
 ひて。書かる、だけの書くべし。すおはちドイツ。インド
 のいの原語ふて母音あるがゆゑふいをかく類なれば。別
 よいはだ。こゝは假名遣としておもあるの漢語原あり。漢
 語原の發音もこみいりたる上ふ。原語の音をあらはす文
 字ならねば。見たるまゝよての知りたければ。一々學
 ばざるべからず。之を字音の假名遣ともいふ。
 まづ左の規則をおがゆべし。

其一 「アイ」「エイ」の母音を持つもの、末音の。あ行

を書く。すおはち。

「愛」埃	の「あい。」	「海」害	の「かい。」
「衆」在	の「ざい。」	「隊」大	の「たい。」
「内」乃	の「ない。」	「配」陪	の「はい。」
「毎」枚	の「まい。」	「雷」来	の「らい。」
「隈」淮	の「わい。」	「回」外	の「くわい。」
「榮」永	の「えい。」	「鷄」藝	の「けい。」
「勢」稅	の「ぜい。」	「帝」泥	の「てい。」
「寧」佞	の「ねい。」	「平」米	の「へい。」
「明」名	の「めい。」	「禮」例	の「れい。」

「衛」の「ゑい」

其二 「ウ井」の母音をもつものゝ末音の。わ。行を書く。すゐはち。

「水」瑞「の」
「せゐ」

「追」對「の」
「つゐ」

「遺」唯「の」
「ゆゐ」

「類」累「の」
「るゐ」

其三 「エイ」の母音をもつものゝ。吳音ふて常は「ヤウ」の母音よかはる。その詞の頭音の。皆同行のい列とある。すゐはち。

「けい」(經)(刑)の

「きやう」とあり

「せい」(青)(星)の

「じやう」とあり

「てい」(丁)(提)の

「ちやう」とあり

「へい」(兵)(平)の

「ひやう」とあり

「めい」(命)(明)の

「みやう」とあり

「えい」(榮)(影)の

「いやう」とあり

「れい」(令)(靈)の

「りやう」とあり

但し榮影の類の頭音を省きて。たゞやうとのみ書くのみ。

其四 音の變はる時。頭音にかからず同行よりつるものあり。故にそのいづれも一方の頭音を知りおくべし。すゐはち。「役」益「の」や「く」ともあれば。同行のえきの音よてゑきよあらざるを知るべく。「遠」園「の」ゑん「の」假名よりて。又「をん」とある

をも知るべく。「し」「い」「お」「つ」あれば。又「い」「つ」あるをも知るべし。

其五 う。とふ。その末音の。決して頭音かゝりても變はる事なし。

其六 濁音の特別あるもの、外。すべて清音のうちも含む。

さて漢語原の詞の漢字もて書く方便利ければ。假名もて書く事は少なければ。中にも蝶蘭の如く全くの本語原と同じやうな。つかはるゝもあまたあれば。その親しく入用なる分をまづおぼえおくべし。

第一。母音の頭にある字

母音もて同音は聞ゆるもの左の

如し。

い	え	お
ゐ	ゑ	を

こゝに、わ。行の假名をかく文字のみをあぐ。おきものはあ。行の假名と知るべし。

爲	章	位	威	胃
委	尉	維	遺	恚
畏	暈			

以上の。

尹 允 勻 員 院

以上のゐん

聿

以上のゐつ

域 血

以上のゐき

この内章の字の類ふの倅。達。圓。華等を含むと知るべく。冒の謂を含み。委の委を含む。尉の慰を含む。維の字形の似たるをもて惟。帷。唯等を含み。買の額。預を含み。域の闕を含む類おして知るべし。

惠 慧 隈 穢 回

會 淮 畫 壞 衛

以上のゑ

衛

以上のゑい

袁 爰 宛 垣 冤

淵 圓

以上のゑん

越 曰

以上のゑつ

この内四の字の類ふの廻を含み。會の繪を含み。袁の遠。穢。園等を含み。爰の援。緩等を含み。宛の怨。篤等を含むと知るべし。

鳥

汗

惡

乎

弘

越

曰

惋

廻

以上のを。

温

穩

以上のをん

屋

以上のをく

膾

以上のをつ

この内鳥は隅あり。乎は呼ありと知るべし。この音ふよりて鳥帽子の系ぼうしある事をも知るべし。

第二。あ。列。お。列。の。頭。は。ある。字。

あ。お。二。列。の。音。よ。て。同。

音よまがふものゝ左の如し。

あ	あ	あ	あ	あ	あ
う	う	う	う	う	う
か	か	か	か	か	か
ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ
さ	さ	さ	さ	さ	さ
う	う	う	う	う	う
た	た	た	た	た	た
う	う	う	う	う	う

其一。あ。わ。お。を。の。假名

これい。わ。お。を。の。假名をお不え

おくべし。

王

往

黄

以上い。わ。

謳

應

以上い。お。

翁

甕

雄

姫

以上い。を。

この内王い。皇。鳳。枉等を含み。黄い。横を含み。謳い。謳の一字を除く外。すべて謳の類を含むと知るべし。

其二。か。の。假名

これい。の。の。假名をお不えおく

べし。

公

孔

工

洪

口

后

鉤

後

寇

厚

侯

候

構

恒

肯

肱

堯

弘

興

劫

業

この内エい。江の一字を除く外。功。紅。貢。鴻を含み。構い。溝。趙。籌を含み。恒い。恒を含むと知るべし。

すべてくの一音い。か。はる音い。エ(大エ)公(公事)口(異口)の類みなこの假名なり。

其三。さ。の。假名

これい。の。の。假名をお不えおくべし。

息	叢	宗	宋	送
走	叟	奏	叢	嗽
曾				

この内息の類にて息。臆の二字と。叟の字の他の一類をいその假名ふあらす。

其四。た。どの假名

これいどの假名をおがえおくべし。

東	同	童	動	桶
冬	統	豆	斗	偷
透	兇	登	等	滕

この内東ふ凍を含み。同ふ洞。桐等を含み。童ふ僮。瞳等を含み。動ふ董。働等を含み。豆ふ頭。逗等を含み。登ふ橙一字の外。燈。

燈等をすべて含み。滕ふ藤。騰等を含むと知るべし。

其五。か。の假名

これいどの假名をおがえおくべし。

農 能

この内農ふ濃。膿を含むと知るべし。

其六。は。の假名

これいどの假名をおがえおくべし。

鳳	豐	封	峰	奉
割	戊	矛	牟	朋
謀	乏	法		

この内奉ふ逢。鋒等を含み。奉ふ捧。俸等を含み。割ふ部等を含

み。牟より畔を含み。朋より崩等を含むと知るべし。

之。法の二字ハ漢音ふてハ「はふ」の音あれど。いづれも用ふるあり。

其七。まもの假名

これハもの假名をお平えおくべし。

蒙

この内ふハ蒙。蒙を含むと知るべし。

其八。らろの假名

これハろの假名をお平えおくべし。

籠

弄

婁

陋

漏

この内籠ふハ籠。麗等を含む。婁ハ婁。陋等を含むと知るべし。

第三。い列の單音とゆをもつ複音との頭の假名

これ

らの音よて同音ふまがふものハ左の如し。

し	ふう
しゅう	ち
ちゅう	ふう
い	い
いゅう	ふう

右の外にりの三音ハ。まがふべき複音なければこの部に入らず。

こハふハ複音の文字のみをあぐ。かきものハ他の假名と知るべし。

衆

終

克

蝨

主

戎

徒

以上ハしゅう

この内從ふハ終を含むと知るべし。

中

柱

蛛

厨

鑄

頭 倫

以上い。ち。う。

この内中ふい忠。虫等を含み。桂ふい注。住等を含み。殊ふい藤。殊を含み。厨ふい厨を含むと知るべし。

雄 熊 融 裕 勇

以上い。い。う。但し。う。どのみ書くなり。

第四。や。よ。をもつ複音と。え。列の單音との頭の假名

これらの音ふて同音よまがふものい左の如し。

け ふう	き よう	き やう
せ ふう	し よう	し やう
て ふう	ち よう	ち やう
へ う	ひ よう	ひ やう

め う	み やう	
え ふう	よ う	や う
れ ふう	り よう	り やう

「ねう」「ねふ」の拗音かければこの部に入らず。

其一。き。や。き。よ。け。の假名

これの拗音をおがえお

くべし。

以上い。き。や。う	況	亨	藍
	杏	向	恙
	更	郷	強
	耿	匡	仰
	竟	狂	香

共	恭	恐	凶	興
矜	兢	凝		

以上いさよう

このうち並みの彊を等み。羌ふの姜を含み。強ふの緇を含み。郷ふの響。響を含み。匡ふの筐を含み。狂ふの誑を含み。況ふの貺。慨を含み。更ふの梗を含み。竟ふの境。鏡等を含み。共ふの供。拱等を含み。恭ふの養を含み。恐ふの蛩を含み。凶ふの匈。胸等を含むと知るべし。

其二。し。や。し。よ。せの假名

あれも拗音をお不えお

くべし。

章	昌	尚	常	將
牆	詳	匠	餉	傷
上	壯	狀	相	象

裏 爭

以上いしやう

鐘	鐘	誦	松	徒
春	悚	茸	冗	彌
升	證	勝	丞	承
繩	乘	仍		

以上いしやう

このうち章ふの樟。障等を含み。昌ふの唱。嘗等を含み。尚ふの商を含み。常ふの掌。嘗等を含み。將ふの漿。嘗等を含み。詳ふの祥。庠等を含み。傷ふの觴。殤を含み。壯ふの莊。裝を含み。狀ふの牀。妝を含み。相ふの湘を含み。象ふの像を含み。裏ふの讓。壤等を含み。爭ふの諍。淨等を含み。鐘ふの腫。衝を含み。松ふの訟。頌を含み。從ふの縱。蹤を含み。春

いゝ蒸を含み。煉ふゝ疎を含み。升ふゝ昇を含み。丞ふゝ蒸。拯を含み。繩ふゝ繩を含むと知るべし。

其三。ぢや。ちよ。ての假名

これも拗音をお不えお

くべし。

長

丈

腸

壤

塚

以上いぢやう

重

冢

寵

濃

徴

澄

以上いぢやう

この内長い帳。張等を含み。丈いゝ仗。杖を含み。腸ふゝ場。暢を含み。壤ふゝ穰を含み。濃ふゝ膿。穰を含み。徴いゝ懲を含むと知るべし。

其四。ひや。ひよ。への假名

これも拗音をお不えお

くべし。但し「ひやう」の音い「へい」の音より轉じたる平兵の類のみみれば。こゝはあぐるゝ及ばぬ。

冰

憑

以上いひよう

其五。みや。めの假名

これも拗音をお不えおくべ

し。

猛

以上いみやう

其六。やよ。えの假名

これいやよの假名をお不えおく

べし。これいもと「いやう」いよう「と書くべきみれど

も。い。文字の略して常は「やう」「よう」と書くあり。

陽 羊 養 様 恙

央

以上のやう

用 容 庸 雍 膺

蠅 孕 勇

以上のやう

このうち陽は揚。揚等を含み。羊は洋。佯等を含み。又用は甬。踊等を含み。容は蓉を含み。雍は擁を含み。膺は鷹を含むと知るべし。

其七。りや。りよ。れの假名

これの拗音をお不えお

くべし。

良 兩 亮 梁 量

涼

以上のりやう

龍 凌 楞

以上のりよう

このうち兩は輜を含み。梁は梁を含み。量は糧を含み。涼は諒を含み。凌は陵。凌等を含むと知るべし。

第五。わの 音とかこの音との字

これらの音ふて同

音はまがふものゝ左の如し。

か
かい
か
かう

くわ	か	く
くわい	かつ	くわく
こわう	かん	くわん

こゝふの拗音の方のみをあぐ。

乖 灰 魁 槐 隤
 化 華 卦 瓜 和
 火 寡 瓦 卧 畫
 戈 科 過 禾 果

悔 怪 快 外

以上いゝわい

この外ゑ音まかはる字。するはち回(回向)會(節會)の類と。其含む字とに皆この假名あり。

光 荒 廣 宏

轟

以上いゝわう

この外「わう」の音ふかはる字。するはち黄(離黄)皇(法皇)の類と。其含む字とに皆この假名あり。

郭 獲 鶴 畫

以上いゝわく

活 豁 猾 月

以上のくわつ

官	丸	觀	冠	完
桓	寬	換	關	還
緩	款	串	元	願

以上のくわん

このうち過ふの禍。蝸等を含み。果にの課。願等を含み。科ふの蜉を含み。化ふの花靴を含み。灰にの恢を含み。槐ふの瑰。傀を含み。回ふの廻。徊を含み。會ふの檜。膾等を含み。廣ふの曠。礦等を含み。光にの晃等を含み。皇ふの惶。蝗等を含み。黃ふの簧等を含み。郭ふの廓を含み。霍にの鑿を含み。獲にの蠖等を含み。活ふの濶。括等を含み。猾ふの滑を含み。丸にの紉を含み。觀ふの歡。灌等を含み。官ふの管。管等を含み。完ふの浣等を含み。換ふの喚等を含み。還ふの環。褰等を含み。串ふの患を含み。元にの頑。玩を含むと知るべし。

第六。う音とふ音との末ふある字

これをまごれぬ

やうふ心得んふい。まづ左の規則を知りおくべし。

- 其一 拗音の頭ある時ふ音のものとし。
- 其二 詰音とあり又つ音とある末音ふいう音とし。
- 其三 頭音いかはりても。これらの末音いうごとく事なし。

右の規則を應用して。こゝふ音のみをおぼえおくべし。

歴 四 押

以上のあふ。歴の歴制の時詰音となり。歴力の時つ音となる。

邑 揖

以上のいふ。揖の揖譲の時つ。音とある。

葉 麿 辟

以上のえふ。

合 盍 甲

以上のかふ。合の合戦の時詰音とあり。甲の甲冑の時詰音とある。

急 及 給 泣

以上のきふ。

叶 協 夾 怯 業

以上のけふ。又のこふ。

雜 颯 挿

以上のさふ。雜の雜誌の時詰音とあり。混雜の時つ。音とあり。颯の颯々の時詰音となり。又つ。音とある。

十 拾 習 執 集

緝 澁 濕 襲

以上のしふ。十。拾の十冊。拾斤の時。集の集註の時詰音とあり。執の執達の時詰音とあり。執事の時つ。音とあり。濕の濕氣の時詰音とある。

妾 攝 捷 涉

以上のせふ。攝の攝政。攝待の時詰音とある。

答 沓 榻

以上ハたふ。

蟄

以上ハちふ。

帖

蝶

疊

以上ハてふ。

納

以上ハかふ。

納豆の時詰音とある。

入

以上ハふふ。

入唐の時詰音とある。

乏

法

以上ハはふ。又ほふ。

法の法度。法華の時詰音とある。

拉

蠟

薦

以上ハらふ。

立

以上ハりふ。

立身の時詰音となり。獨立の時つ音とある。

獵

以上ハれふ。

このうち押ハ鴨。押を含み。邑ハ泥等を含み。魔ハ磨を含み。合ハ閤。恰等を含み。壺ハ閤を含み。甲ハ匣等を含み。及ハ汲。笈等を含み。脇ハ脅を含み。夾ハ俠。狹等を含み。怯ハ劫を含み。十ハ什。汁を含み。習ハ摺。褶を含み。緝ハ輯。輯等を含み。妻ハ穢を含み。捷ハ睫。睫を含み。答ハ塔を含み。沓ハ踏を含み。榻ハ蹋

を含み。蟄ふに蟄を含み。帖ふに貼を含み。蝶ふに蝶を含み。納ふに納を含み。蠟ふに蠟を含み。立ふに笠。粒を含み。蠟ふに蠟を含むと知るべし。

第七濁音の字

同音ふまがふ濁音に本語原のふ同

じ。まづ知りおくべき事左の如し。

其一 清音ふよりて知るべきものあり。すなはち治。神の類に濁音ふなりても假名かはらむ。

其二 同行の清音ふよりて知るべきものあり。すなはち豆(づ)圖(づ)普(じやく)の類に清音の時「ど」う「せき」あれば。濁音ふなりてもその頭音同行を出でむ。

さればこゝにち。音の假名のみをおかえおくべし。づ音に同行の清音を持つものゝみなれば。あぐるゝ及ばむ。故に左ふあげざるものゝち音。同行の清音ふた行あきものゝず音と知るべし。

尾 臑 備 痔 持

以上いぢ。

この内臑。備。痔。持の四字に臑。爾。寺等の類を離れて。ぢ音ふひとり入りたるあり。

笠 軸 釵

以上いぢ。

この内軸ふに軸を含む。

昵 睚

以上のち。つ

陣 塵

以上のち。ん

除 杼 女

以上のち。よ

この三字もひとりぢ音ま入りたるよて。同類の文字をば含まず。

木 怵

以上のち。ゆつ

これも二字のみふて同類の文字をば含まず。

こゝに再び外語原の假名遣ふ入用の文字を繰り返して。

表ふ示すべし。表中の平假名の以上ふて學びたるもの。片假名の及不して反對ふ知るべき文字。又の規則ふよりて知るべき文字を示すあり。

頭		音	
を の類	烏越	ゑ の類	繪遠
を の類	烏越	え の類	役縁
ゐ の類	胃院	い の類	意育
やう音 の類	陽狂章	よう音 の類	氷用
ち の類	軸塵	くわ寛の 類	郭活
ズヅ の類	自仁 圖隨	カ の類	改角
		エ列朝の 類	業召

お謳翁 を王の わ類	お列東の 公宗類	ゆ音勇の 主中類	
ア 櫻央の類	ア列刀の 高操類	イ列立の 周注類	
末 音		ふ 集蝶の類	
	イ 愛榮の類	井 水追の類	ウ 上中の類

問 題

- 一。さ。行。お。行。の。文。字。を。あ。め。せ。
え。列。お。列。の。文。字。を。あ。め。せ。
- 二。母。音。と。い。如。何。か。る。も。の。ど。そ。の。種。類。を。も。説。明。せ。よ。
- 三。子。音。と。い。如。何。か。る。も。の。ど。そ。の。種。類。を。も。説。明。せ。よ。
- 四。鼻。音。を。説。明。せ。よ。
- 五。濁。音。を。持。つ。べ。き。文。字。を。し。め。せ。
- 六。假。名。と。漢。字。と。の。區。別。を。し。め。せ。
- 七。假。名。ふ。幾。種。類。あ。る。ど。
- 八。漢。字。ふ。幾。種。類。あ。る。ど。
- 九。時。雨。百。合。時。鳥。七。夕。何。字。の。種。類。あ。る。か。
- 十。外。語。原。の。種。類。を。あ。め。し。中。ふ。も。し。ろ。く。行。い。る。種。類。を。名。ざ。せ。
- 十一。山。吹。牡丹。卯。花。鷄。頭。海。棠。の。内。よ。り。外。語。原。を。あ。め。せ。
- 十二。

十三 てんわう(天皇)ぎやうじや(行者)みやうじやう(明星)をんる(遠流)
まかう(回向)くやう(供養)ひやうぶしやう(兵部省)は外語原の内何
音の種類ありや。

十四 通音とは如何なるものぞ。

十五 音便の例を五つしめせ。(上にあげたる外を)

十六 略音の例を五つしめせ。(上にあげたる外を)

十七 連音の種類をしめせ。

十八 諸音の例を五つしめせ。(上にあげたる外を)

十九 左の詞の假名をしめせ。(本語原に讀みて)

家	石	鳥居	稻	鹽	圓居	母上
襟	入江	沖	親	菴	顔	少女
句	河	淡雪	野分	粟	倭	

二十 ぢ音の詞とづ音の詞とを十づしめせ。

二十一 左の詞の假名をしめし。又その規則を説明せよ。(外語原に讀みて)

開扉	文才	聖代	玉杯	會讀
稽古	朝廷	幣帛	冥途	命令

二十二 末音ある文字を書くに何々の詞ぞ。

二十三 左に詞に假字をしめせ。(外語原に讀みて)

經文	綠青	衆生	仕丁	兵糧
平等	佛名			
後胤	逸史	醫書	淨衣	延喜
音樂	園城寺			
幾驚	考證	行幸	藥草	箏
歌道	金堂	瑪瑙	女房	袍
盲目	廊下			
猛獸	晝夜	燒酎	優美	御遊

朋友

校合

教訓

少年

樵夫

眺望

調子

漂泊

誤謬

妙典

要用

幼少

料理

右馬寮

和文典上卷終

